

何年か前に見たブラッド・ピット主演の映画「トロイ」は、ギリシャ神話のホメロスの叙事詩「イリアス」を描いた映画だが、物語がかなり忠実に描かれていた。主人公はアキレウス、彼は神の子だが人間として友を愛し戦争を憎む、悩める英雄である。

古代から何世紀にも渡って語られてきたホメロスの世界は、見事に歴史的な一つの事実として存在している。そこに描かれる古代の人々の悩みや哀しみは、時代を超えて受継がれ、語られていくのである。



パリスの審判

トロイアの王子のパリスがスパルタの王女ヘレネを奪ったことが、ギリシャとトロイアの十年もの長い戦争の原因となるが、それはゼウスの意思でもあった。

ある時ヘラとアテナとアフロディテの三人の女神がオリンポスの山を降りてパリスの元に行き、パリスに審判を求めた。そしてパリスに約束した。もしヘラを一番美しい女性として選んだ場合は全人類の王になることを、アテナは戦争の勝利を、アフロディテは絶世の美女ヘレネとの結婚を。

そこでパリスは迷うことなくアフロディテを選んだ。そして神々の求めに応じ、ペレクロスが建造した船でギリシャのスパルタへと航海し、ヘレネを自分とともに出奔するよう説き伏せた。彼女は9歳になる王子を後に残し、スパルタ王の留守の夜に大部分の財宝を船に積み込んで、パリスとともに海に出た。

二人がトロイアの宮殿に入った時、カッサンドラが父王のプリアモスに言った。「お父様、決して兄とヘレネをトロイアに迎えてはいけません。私にはギリシャの大軍に攻められ、炎上するトロイアの町が眼に映るのです」

しかし、プリアモスもトロイアの人々も彼女の言うことを信じず、二人を祝福した。カッサンドラの美しさに曳かれたゼウスは、彼女に未来を予見する力を与えたが、人々を信じさせる力までは与えなかったからである。

スパルタ王の兄のアガムメノンはただちにギリシャ中の王たちに使いを送り、「ギリシャの威信が傷つけられた。いまこそ我々は協力してトロイアに遠征し、ヘレネを取戻さなければならない」と訴えた。

こうしてギリシャ中の王たちが集結地のアウリスに向かったが、ギリシャの勇者といわれたアキレウスの母のテティスは、もし息子が戦いに加われば死ぬ運命にあると知っていたので、息子に女の服を着せて戦いに行かせないようにした。しかしアキレウスはイタケの王のオデュッセウスに説き伏せられて、戦いに参加することを選び、ギリシャの王たちと共にトロイアへと旅立った。

アポロンの怒り

アガムメノンの率いるギリシャ軍はトロイアを9年の間攻めたが、トロイアの城壁を破ることはできなかった。ギリシャ軍は食料も衣服も兵士たちの数も乏しくなってきたので、トロイアの周囲の町々を攻めて食料を奪い大勢のトロイア人を捕虜にした。その捕虜たちの中にアポロン神殿の神官クリュセスの娘、クリュセイスも混じていた。クリュセスがアガムメノンの元に来て言った。

「もし、無事に娘が私のところへ帰ってくるなら、神々はあなたがたを守ってこの戦いの勝利と、ギリシャ人がふるさとへ帰ることを約束されるだろう」

ギリシャの王たちはクリュセスの言葉を歓迎した。彼らはトロイアとの戦いに疲れており、ふるさとに帰ることを望んでいたが、アガムメノンはクリュセスの言葉を受け入れず、クリュセイスを返さなかった。年取った神官は悲しみの涙を流し、アポロン神に祈った。

「私の娘と誇りを奪ったギリシャ人に、彼らが何をしたのか思い知らせて下さい」

アポロン神は、この願いを聞き入れた。自分の祭司とその娘に対するギリシャ人の無礼な行いはアポロンを怒らせたのだ。アポロンは弓矢を手にとると急いでオリンポスの山を下り、ギリシャ軍めざして矢を射かけた。その矢は恐ろしい疫病となって、ギリシャ全軍の間に広がっていった。

最初はイヌやロバが死んだ。続いて人間が次々に死んでいった。この有様を見ているアキレウスは会議を開き、ギリシャ軍の王たちに呼びかけた。

「なぜ我々はここに止まって死ななければならぬのか。戦いで死ぬよりももっと多くのものが疫病で死んでいる。なぜ神の怒りがわが軍の上に降りかかるのか」

予言者のカルカスが立ち上がって、アガムメノンが神官の娘を奪って返さないことがアポロン神の怒りを招いたことを説明した。アキレウスが言った。

「アガムメノンに真実はない。ギリシャ軍は神に見放された。私は今こそ母の待つギリシャに帰ろう」 アガムメノンがギリシャの王たちに言った。

「今、ギリシャに帰ったら、後の人々はわれわれを卑怯ものと笑うだろう」

しかし、次の戦いもその次の戦いもトロイアが勝利を収め、トロイアの軍勢は都の外まで攻め出してきて、次第にギリシャ軍は海岸に追い詰められていった。

立ち上がるアキレウス

ある日、アキレウスの親友の年若いパトロクロスがアキレウスに言った。

「ああ、アキレウス怒らないで下さい。味方は酷いことになっている。敵は我々の海へ追い落とそうとしているのだ。それでもあなたはまだアガムメノンに対する怒りのために、味方を助けようとしなさい。あなたが戦いたくないなら、私にあなたの鎧と、強い部下を貸してくれ、私はあなたのかわりに戦おう」

アキレウスはパトロクロスに自分の鎧と部下を与えた。そして彼のためにゼウスに祈った。ゼウスはその祈りの半分を叶えたが、半分は叶えなかった。

突如、戦場に現れたアキレウスの軍団に驚いたトロイア軍は背走を始めた。それを見たトロイアの王子のヘクトルは戦車に乗ると、一人ギリシャ軍の中に身を躍らせた。彼は軍団の中央に居るパトロクロスをアキレウスと思い、挑みかかった。パトロクロスは決して単身で戦わないよというアキレウスの忠告を忘れ、ヘクトルと一騎打ちになった。この時、太陽の神アポロンがヘクトルに味方した。パトロクロスはヘクトルの兜のまぶしさに、一瞬目がくらんだ。次の瞬間、パトロクロスの胸をヘクトルのやりが貫いていた。

パトロクロスの戦死を聞いたアキレウスはゼウスを呪った。ゼウスは彼の祈りを受け入れギリシャ軍に勝利を与えたかわりに、親友の命を奪ったのだ。アキレウスは初めてアガムメノンに対する怒りを捨て、親友の鎧と兜を身に付けた。その時、アキレウスに女神のヘラの言葉が聞こえた。

「おお、アキレウス、パトロクロスを殺したのはアポロン神です。でもあなた達はヘクトルが殺したと思っている。しかしそのヘクトルも神の力で殺されるのです。そして、アキレウス、あなたもまた神々と人間のために殺されるでしょう」「それが私の運命なのだ。だが私は友の仇を討つために行かなくてはならない」

こうしてアキレウスは再び戦場に出掛けた。アキレウスを恐れたトロイア軍は城門を開けて、先を争って城の中に逃げ込んだ。しかしヘクトルだけは城壁の外に止まって、ギリシャ軍を迎え撃とうとした。城門の上からその有様を見ていた老王プリアモスと妃のヘカベは、ヘクトルに呼びかけたが、彼は答えて言った。「私はトロイアの王子です。わたしの命令で人々は死んでいったのです。その私が敵から逃げ出して城壁の向うに入ったら、人々は何と言うでしょう」

こうして、ヘクトルは父親と母親の見ている前でアキレウスに討ち取られた。アキレウスはヘクトルの死体を戦車で引いて帰った。そのアキレウスもヘクトルの弟のパリスに、踝（くるぶし）を矢で射抜かれて死んだ。アキレウスは生まれたとき、母親のテティスがアキレウスを死者の川に漬けて不死身の身体になったが、テティスが赤子の踝を掴んでいたため、そこだけは不死身ではなかったのだ。

トロイの木馬

果てしない戦いは十年目に入り、ギリシャ軍は空しい攻撃を続けていた。トロイアには空から落ちてきたと言い伝えられているアテナの像があり、この像があるかぎりトロイアの城壁が破られることはないと言われ、人々は信じていた。

ある日、その城壁の上で見張りをしていた兵士の一人が、ギリシャ軍の船が次々と沖へ遠ざかって行くのを見た。それは彼らが長い戦争にあきて、国へ帰っていくように見えた。人々が城門を出てギリシャ軍の陣地に行くと、人気のない戦場に、大きな木馬が立っており、その胸の部分には「ギリシャ人よりアテナの女神に捧ぐ」と大きく彫り付けてあった。

知らせはただちにトロイア王を始め、全てのトロイアの人々に伝えられた。人々

は長い戦争が終わったことを信じた。そしてギリシャ人が残したこの記念の品を直ちに城内に引き入れて、アテナの神殿に捧げようとした。

その時、ポセイドン神殿の祭司ラオコーンが人々に叫んだ。

「木馬を城内に入れてはいけない。ギリシャ人を信じてはいけない。この木馬には仕掛けがあるに違いない」

その時である。海の中から二匹の大蛇が現れ、人々に近づくと見る間にラオコーンの二人の息子に巻きつき、大声をあげる息子達を殺してしまった。

この出来事を見た人々はラオコーンにアテナの神罰が下ったと叫んで、争って城門を開けると、木馬をうやうやしくアテナ神の神殿に供え、戦争が終わったことを喜びあい、祝杯をあげ、夜遅くまで宴を催した。しかし、その時、トロイア王の横で人々の熱狂を見ていた王女カッサンドラには、はっきりと見えていた。人々が寝静まった後、木馬の腹の中から現れるギリシャの兵士たちが、夜明けとともに城内になだれ込むギリシャ軍が、炎上するトロイアの城と町が、そして捕虜としてギリシャに連れ去られる自分の姿が - 。

ドイツ人の商人、ハインリヒ・シューリマンがトルコのヒサルルクの丘で伝説の「トロイア王国」を発見したのは、1873年のことである。ギリシア神話上で、もっとも古く、もっとも有名で、古代ギリシアの詩人ホメロスが叙事詩「イリアス」で伝えた「トロイア戦争」をめぐる物語は、歴史の事実だったのである。

ギリシア神話は、古代ギリシアの諸民族に伝わった神話・伝説を中核として、様々な伝承や挿話の要素が組み込まれて出来上がった神々と英雄たちの物語である。今日、ギリシア神話として知られる物語は、およそ紀元前15世紀頃に遡る。それはギリシア各地の吟遊詩人たちによって、口承形式で詠われ伝えられてきた。紀元前9世紀または8世紀頃に属すると考えられるホメロスの叙事詩「イリアス」と「オデュッセイア」は、この口承形式の神話の頂点に位置する傑作である。

口承でのみ伝わっていた神話を、文字の形で記録に留め、神々や英雄たちの関係や秩序を、体系的に纏めたのは、紀元前8世紀の詩人ヘシオドスで、その後、ギリシア文明の成熟とともに、幾人もの著述家や詩人、さらには劇作家によってさまざまなギリシア神話が「創作」されることになる。古代オリンピックがオリンポスの神々に捧げられる儀式だったように、ギリシアの人々は民族に伝えられた物語を、詩や劇にして神々に捧げたのである。

今回参照したのは、岩波文庫の「ギリシア神話」で、これは紀元1世紀にギリシア人のアポロドーロスが古い文献を元に纏めたもので、その中には「トロイア戦争」が、まるで神と人が混じり合って織り成す歴史書のように書かれている。

小アジアに存在したトロイアがギリシア先史時代のミケナイ人に侵略され、滅亡したのは紀元前1250年頃に実際に起こった歴史的事実であった。そこにはアキレウスもヘクトルもヘレネもカッサンドラも居たに違いない。